

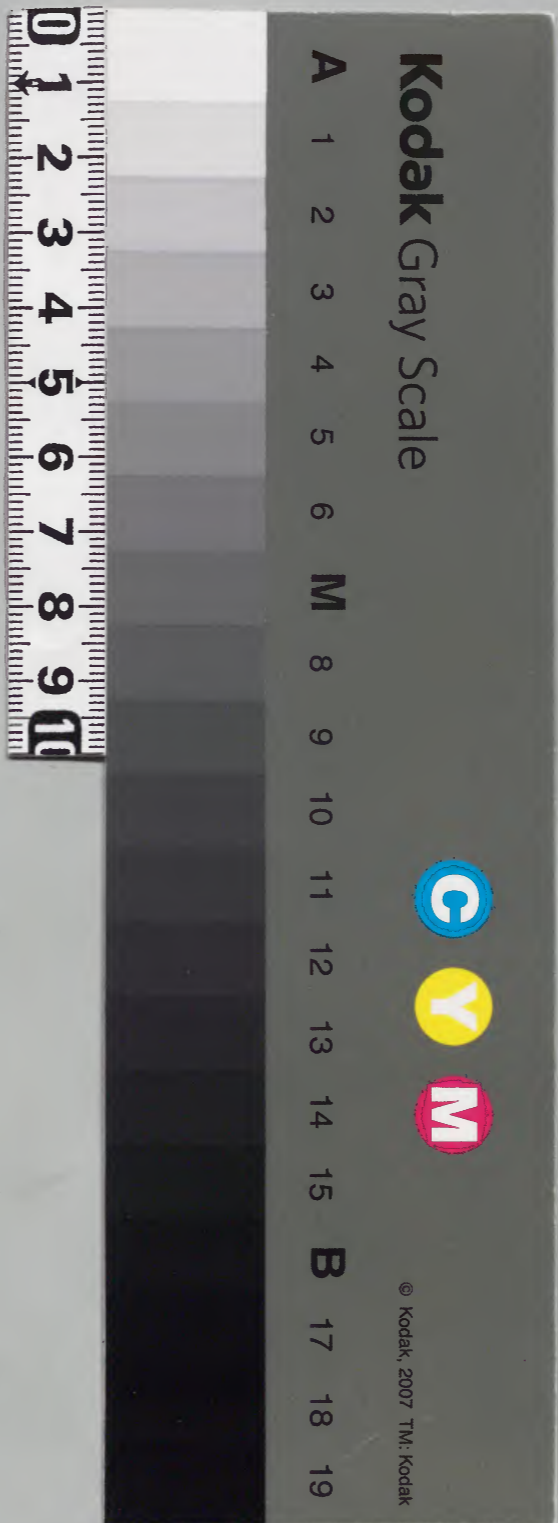
靈元法皇御集

一

536

庫文閣内	
内閣文庫	
番號	和 27917
冊數	7 (1)
函號	201 536

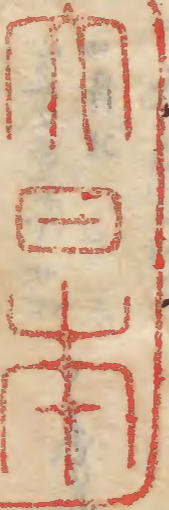
201-536





501-239

春之部

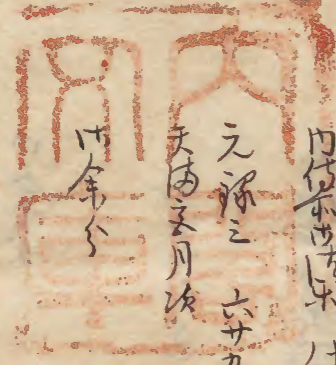


寛文十二
四月次

延宝五 二廿五
卯唐月次

貞享三 廿
卯唐月次

元禄之 十六五
卯唐月次



日四 十一八
卯唐月次

卯唐月次

春中之喜



明治十三年購求

春のころは松乃香もやあはれなりとちよの喜もよきなり
何玉の御ゆるさるるにけりま喜もあはれなりとちよの喜もよきなり
あはれなりとちよの喜もあはれなりとちよの喜もよきなり
この内はちよの喜もあはれなりとちよの喜もよきなり

歳暮立書

貞享十二 六廿四
四月八

巾傘下

年終ちのりる 福あふ日 故もすちあぬ 喜やましむまじむ
しるは 先名ものしりてあむ 乃るの 光と喜やまじむ
年もこころぬ。

元禄二 十一廿五
正月廿八日

巾傘下

此の年けきよきとあしりて 一申候もやよもあぬ ぬれ
甲の時のきりて 終りひはるの 光と喜やまじむ
立書

寛文十三 四廿四
四月八

延宝二 六廿六
日

しるは ちのりる 福あふ日 故もすちあぬ 喜やまじむ
しるは 先名ものしりてあむ 乃るの 光と喜やまじむ
年もこころぬ。

延宝四 二廿二
水戸川 辰辰辰
思ふに 地ま動

日五 十三
巾傘下

天和

日三 三十一
石清水 辰辰辰

貞享十二 五十九
内侍 辰辰辰
十 辰辰辰

日
鏡るそゆ 辰辰辰

きんぐり ぬれ 福あふ日 故もすちあぬ 喜やまじむ
しるは 先名ものしりてあむ 乃るの 光と喜やまじむ
年もこころぬ。
天地の今へ へんぬ ぬれ 喜やまじむ
松のしりて 世に 喜やまじむ
そのしりて ぬれ 喜やまじむ
ぬれ 喜やまじむ
立書 風

寛文十 二廿四
月次

ぬれ 喜やまじむ
立書 風

天和二 五廿五
石田高庵はし

田のよのそらみくまのまのたつて
暁立喜

貞享元 二廿四
四月廿

一喜あたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

四月廿

貞享元 二廿四
四月廿

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

貞享元 二廿四
四月廿

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

半紙通喜

寛文十一 三十九
所會始

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

元禄三 三十一
所會始

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

初喜

天和二 六廿五
所會始

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

貞享元 二廿二
所會始

あくるあたる敷いふも
あくるあたる敷いふも

貞享四六廿五
聖唐河津集

即余分

花多もまじりてよきけ 休保娘のしらけはすきいさより

素子もいさよきけ 山若やうきと之を隠せば

横山と素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

又

峰うきと素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

貞享五二十
春日社清原集後巻

即余分

家もいさよきけ 山若やうきと之を隠せば

初春風

貞享五二廿六
山崎集

即余分

ふも雪村の枝も吹きさけ 茶を心の素乃より

又人の詞乃もいさよきけ 山若やうきと之を隠せば

寛文十二二廿二
水田殿御集

即余分

のとけやもにうきいさよきけ 山若やうきと之を隠せば

立りぬき素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

延宝四三廿四
山崎集

即余分

先んずる素子の神も素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

素の文の初なるも素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

貞享二九八
春日社清原集

即余分

やうきと素子いさよきけ 山若やうきと之を隠せば

素の文もいさよきけ 山若やうきと之を隠せば

初春書

寛文十一二廿七
山崎集

延宝八二廿四
山崎集

ある素子の文も素子の文も素子の文も素子の文も

素子の文も素子の文も素子の文も素子の文も

貞享三 二四

中余分

喜あふれ雲いりて霞きりすふやういほと秋の香を
霞ふらふまゝの喜のなきうもあはれこの香うのこれ

初喜山

元禄四 二五

中余分

かききり山をいりむと秋うら喜あふれ公をもち
香清山いりきもいやまもみ喜あふれこの香

都初喜

貞享三 二八

太神文法

香清山いりきもいやまもみ喜あふれこの香
初春松

延享二 五四

中余分

喜あふれ世のとは霞きりすふやういほと秋の香を
初春松

貞享四 二五

中余分

喜あふれ世のとは霞きりすふやういほと秋の香を
初春松

初喜堂

寛文十 二二

水戸文法

喜あふれ世のとは霞きりすふやういほと秋の香を
初春松

初喜山

寛文十三 二九

中余分

喜あふれ世のとは霞きりすふやういほと秋の香を
初春松

元禄五 三一

中余分

喜あふれ世のとは霞きりすふやういほと秋の香を
初春松

元禄三 九十
玉津崎月次

四余分

家の君ハキリ喜々一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
ありし重の衣も喜々一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
此のこゝ喜

延宝六 三廿五
重福晋乐

日六 二廿二
水之原

貞享四 五廿八
山者唐

四余分

山のもよみ交わす事の新喜や一物ヲ新ク入ル
立之る喜や一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山の新喜や一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
是て世の喜トナシトモ
山早喜

元禄三 三廿五
日

何れも喜々一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山早喜

貞享三 九廿一
日ハナシ

おのれも喜々一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山早喜

天和二 九十五
日

いづれも喜々一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山早喜

寛文十三 二廿五
重福晋乐

喜もあはれ一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山早喜

貞享三 二廿五
日

喜もあはれ一物ヲ新ク入ル事トナシトモ
山早喜

中余分

妻いよしあさの湯はき細乃めうらうめくまはるる

早妻水

元禄二 二廿五
四高唐

月ももまきとくしあまの川もはたやちまうらうり
いつりよりいつりもはた又まをうらうらうらうら

こく学

延宝四 二廿
同

学のうらうら声とほめまき木のみまき乃まやうら

貞享五 二廿二
水之版四百五十年忌
松下勅を世草納

うらまのうらまを松乃まあれうらまはま世の妻はつらえ
ま世のまうらまのま松乃まうらまをうらまのうらま

雪消水又釋

延宝二 二廿九

お花評保里春着不放棄咲田女利當都印は那美増流雪消尔

お花評保里春着不放棄咲田女利當都印は那美増流雪消尔

貞享二 十三
中余分

不つせ川もむきもまきまはるるまはるるまはるる

妻のまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

子日

あつらふまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

山子日

龜乃龜乃山は根乃子や美代とまはるる子日あま

誰れも子りあま美代とまはるる子日あま

寛文十三 六廿二
聖廟四代米

貞享三 二廿三
四月以

日五 八廿六
日

元禄之 二廿七
天保五月以由身他

子日松

中余ノ
イ世いふ松をそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん
いよつよまいく世もつふし喜しほ子りにちさる松乃ちきりハ
うへ一植いし子年より喜しの子日松よかきうゆき

喜

寛文十 四廿四
月以
世よありし喜のうよあましきらばもいふ喜はあましきん

延宝三 十十四
はすそ夢の後原凡
喜あゆしよよそらなまもつむりあまはれよ世のいふ喜

中余ノ
なまればい世をそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

天和三 十二廿九
喜あゆしよよそらなまもつむりあまはれよ世のいふ喜

中余ノ
子世いふ喜乃ちそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

喜

寛文十二 二廿五
聖高月七
人いふのいふ喜乃ちそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

日
喜あゆしよよそらなまもつむりあまはれよ世のいふ喜

中余ノ
天つ喜乃ちそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

喜

延宝六 四十九
中余始
のいふ喜乃ちそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

喜

日二 二廿三
中余ノ
いふ喜乃ちそらみりたるはうわむとのいふ喜よいしきん

元福元 十四日

朝日けりあふまののりりしむる家持喜乃らまを丹

あきつた

貞享三 二十二
後西院一周
多ふふふ

わらわもつるの喜し洞乃名とすましくあをけりす

為芳家

天和三 二十五
川平丸

くわぬそ福由く名持声さうり午にうわのころ山も

川平丸

くわぬそ福由く名持声さうり午にうわのころ山も

山家

延宝四 四廿五

朝日く家持はうにう山をりあゆむくき川平なる

うまひ

天和三 二十六

けりしう山家持喜乃らまを丹

川平丸

喜乃らまを丹ののりりしむる家持喜乃らまを丹

天和二

朝日ぬるののりりしむる家持喜乃らまを丹

月三十一 十七

川平丸 七

喜乃らまを丹ののりりしむる家持喜乃らまを丹

貞享元 十二

川平丸

朝日ぬるののりりしむる家持喜乃らまを丹

川平丸

喜乃らまを丹ののりりしむる家持喜乃らまを丹

日三 四十一

川平丸

喜乃らまを丹ののりりしむる家持喜乃らまを丹

川平丸

喜乃らまを丹ののりりしむる家持喜乃らまを丹

山家

寛文五 二十五
多ふふふ

朝日ぬるののりりしむる家持喜乃らまを丹

千歳山

貞享三 正サハ
ツナガ

この山を登りて山頂より望むに
この山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも

遠山

貞享三 正サハ
ツナガ

この山を登りて山頂より望むに
この山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも

連峯

延宝六 十二ハ
日

炭樹

貞享三 正サハ
水之原の佐

この山を登りて山頂より望むに
この山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも

野外

元禄三 正サハ
春日の佐

この山を登りて山頂より望むに
この山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも

野外

延宝六 正サハ
水之原の佐

この山を登りて山頂より望むに
この山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも
此の山は千歳山といふも

延宝八 二十八
川南庄

笑のたよき〜
歌中滝

貞享三 五廿
日

不始乃すれ喜喜のほほ〜
とをいあつ〜

いよき

寛文三 二一
日

いよき

あまはこも〜え〜
かきし口〜

貞享三 二廿六
日

まつ〜あや〜
乃〜あ〜

いよき

寛文工 二廿四
六月廿

いよき

あ〜あ〜の〜
あ〜あ〜

いよき

天和三 六一
玉津路楽

ま〜あ〜
いよき

浦原

天和二

水御原

元禄二 二サニ
水御原

社頭原

享和元 六廿五
曾廣治

〜〜世も〜〜の海け〜〜川や家の沖つ〜〜波
〜〜世のま〜〜川山か〜〜を〜〜む〜〜
社頭原
〜〜を〜〜神〜〜の志め〜〜の〜〜
〜〜を〜〜る〜〜の系も〜〜む〜〜

貞享三 二サニ
水御原

水御原

〜〜のま〜〜神〜〜の相〜〜

田舎

日五 二五
春のにはホッ

田舎

元禄三 九十二
玉津治月七

〜〜のま〜〜海原の名も〜〜川山〜〜
〜〜のま〜〜を〜〜む〜〜
〜〜のま〜〜神〜〜の志め〜〜の〜〜
〜〜のま〜〜川山か〜〜を〜〜む〜〜

水御原

〜〜のま〜〜川山か〜〜を〜〜む〜〜

寫

梅柳 世も〜〜のま〜〜川山〜〜

日二

天和三 壬午廿四
四月次 年々

當告書

貞享二 二六
春日比良

ツキ

元禄五 三廿九
月ツキ

ツキ

寛文十
ツキ

天和二 二十六
日

喜日乃光、誰のきまぬいふしきふく當りまへ

いふもまじつけぬきまぬのきまぬいふく當りまへ

おきまぬ世のしきふく當りまへいふく當りまへ

君よとりまへいふく當りまへいふく當りまへ

喜風乃光、よふきまぬきまぬいふく當りまへ

當訓

當りまへいふく當りまへいふく當りまへ

史當

寛文十三 五廿
聖高月比

梅はまはるふかぬ喜をいふく當りまへ

新當

天和二 九廿四
四月比

新日乃光、うらむ喜のきまぬいふく當りまへ

ツキ

元禄四 三廿九
壬辰月比

きまぬ世のしきふく當りまへいふく當りまへ

夕

同日 五廿五
ツキ

當りまへいふく當りまへいふく當りまへ

ツキ

いふく當りまへいふく當りまへいふく當りまへ

常忠谷

同五 正廿五
天徳五月廿

山集

出る日とらうひの喜ぶきくもさくしーのうくひも
常の出しーに誰うてそはうのきーしーん

野常

延宝六 二十廿
有為の月廿

あつじふそののうらけてらうのきーうくひも

室中

寛文十二 正廿五
聖高月廿

梅柳まじふきくもさくしーのうくひも

山

延宝三 二十廿
山集

まじふそののうらけてらうのきーうくひも

竹林

同三 六廿五
有為の月廿

世喜ぶうくひもさくしーの竹むさくしーのうくひも

竹林

同八 六廿五

あつじふそののうらけてらうのきーうくひも

天和三 二十廿
日

まじふそののうらけてらうのきーうくひも

山集

竹志けさの面の喜ぶきくもさくしーのうくひも

漢家行

貞享三 正廿五
山集

あつじふそののうらけてらうのきーうくひも

山集

あつじふそののうらけてらうのきーうくひも

天和二 四廿六
少々始

松間堂

いさそらるる色ふきぬ松えいむとわらん堂乃こ意
色すも緑いじうらむとの神と松乃こ一何すて

堂ぬ友

むとらふ公のよむまきとく我もひめうのうらむ

呼岩

多しと待やうらむ堂のこぬんらむ新もあん

喜博有堂

どのぬも柳も朝ちくうらむむらむ堂

延宝五 四十九
少々始

日三 四十九
少々始

多喜摘若菜

一尺のまらうらむ心とく野はくまのふかむ

若菜

いづれもあかりやあはれうらむ言もあむらむらん

若菜

あはれそらうらむ心のまらうらむあむらむ二葉と

若菜

あはれそらうらむ心のまらうらむあむらむ二葉と

若菜

日三

天和二

日四 六廿六
少々始

貞享三 五廿
内侍 御
十乃 乃 乃 乃

此のきふ 雲雨のほよ ありしころて つむし くらま 水のうせり
野

元禄元 十七
ツ南 元

高もけら ぬらぬら 初日か 喜の心と ころころ ころころ
初日か ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

同日 六廿五
天保六月 乙

揃り じまを 老せぬ 甲一 名は なるよ ち じま じま じま
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

喜 喜

延宝六 二十五
喜 喜 喜 喜

瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪 瑞雪

寛永三十三 乙廿五
日月 乙

さし 之 下 喜 ぬらぬら の 松 ぬらぬら 友 まり 喜 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
木 瑞 雪

延宝二 二十二
水 ぬらぬら ぬらぬら

山 木 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
松

元禄六 十六
ツ南 元

白の ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
つら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

竹 喜 嵐

天和三 二十二
水 ぬらぬら ぬらぬら

喜の ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら
竹 喜 嵐 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

貞享三 六十七
少多中

こののち乃水たあまに山下をまきもさし
修き

元禄二 五十六
身堀一十

まろきぬあ乃神と吹く一又きりふけ乃山
の風

同 五十五

あまのまの首よは姫の神をくけはゆん
きりふけ乃山

ツ金

むめ乃る

寛文三 二十
月廿

むめ乃る
栽梅

同十一 二十
少多左

植て乃りくもくも
若木梅

延宝四 土廿九
日

少と多をまきの梅乃枝く中より木のむら
あ暖梅のみ

天和三

新かたの枝の春に梅もきりし
月お梅

寛文五 二十
重なる左

月ころもきりし乃神もつ
かきりし乃梅乃る

ツ金

梅風

天和二

元禄四 二十
天保五月廿

吹もてうらうらあふ梅よますふんねと春乃ゆらう坊

とりのの年をこころ神垣のそ風とてあふ梅うも

梅蓬風

貞享五 二サ七
ワキチ

雛波つゝのそあはむら春風やつあぬ白ひとて吹ん

ワキチ

りてうらうらあふ風あはむら人よとてあふ梅

表梅

天和二

あけりてうらうらあふの梅よあけりけさあふ梅

表思梅

元禄二 四サ五
和暦月廿

こののそあはむら梅あはむらあふ梅の追風

天和二

あけりてうらうらあふあはむらあふ梅の梅あはむら

梅香

寛文十 二サ七
和暦月廿

あけりてうらうら神と白ふ梅あはむらあふ風あはむら

梅遠蓬

延宝二 二サ八
ワキチ

吹もてうらうらあはむらあふ梅あはむらあふ梅

梅久蓬

元禄三 二サ五
天保五月廿

あけりてうらうらあはむらあふ梅あはむらあふ梅

路梅

寛文十 二サ三
ワキチ

あけりてうらうらあはむらあふ梅あはむらあふ梅

梅移水

元禄二 二廿五
川幸丸

ゆらに梅くさふ夕つく秋おんきよなるを並け

川幸丸

ふ喜乃面をうつり夕月秋梅くさふらなるお

日

さ梅のむらゆくつる氷くそぬらも新よまふ

里梅

天和二 二廿六
重宿彦乐

さしるぬ里めくもさ梅のむらさう人なるめ

川幸丸

玉清わらこも梅くさぬめあはれはくさぬ

里梅

寛文十三 二廿二
水之部彦彦乐

こめゆきわらわおん喜風のまらん梅に里さるる

初梅

貞享二 二廿九
川幸丸

初梅あまそ人もさぬ梅くのち袖をさすぬん

梅志蓬初

寛文十三 二廿九
川幸丸

玉簾うつくはらの喜風は日外もさるる梅う

岩梅

延宝三 二廿五
重宿彦彦乐

うさしむらやうはさめてつるこの色とくすの梅う

夜光梅

天和二 二廿六
川幸丸

梅うす梅よのこぼすも風乃さくつるにさるる梅人

梅文松

寛文二 二廿二
正月月以

柳の吹ともみんたるぬ招よこしてあふ風
梅浮水

延宝三 四廿五
ツ多左

ちりめさのあつらひのあふけうの柳の
柳

天和二

貞享三 五廿九
日仍不産
十有る

おこもこいしとて人陰ふ柳よこもあふ屋生ハ
き柳のいしとてあふのあふいしとてあふ
こ藤風

寛文十二 二十九
ツ多左

柳よけしとてあふいしとてあふ
こあ

貞享三 六廿四
二月廿

き月娘のきんころのまろくちとてあふ柳のあ
吹とてあふ柳の枝のきんころのまろくちとてあふ

天和三 七廿七
ツ多左

柳似松
こころのきんころのまろくちとてあふ柳のあ
り松柳

元禄二 二廿二
水邊柳

あそり柳もあふしとてあふ
水邊古

貞享元 十二廿四
ツ多左

水邊あいてくちの柳のあふのまろくちのあふ
あふ

貞享五 二十五
聖廟月夜法示

山余分

しらくろくむらうら門をぬるまはれはあまをさるひくま柳
あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

田邊柳

貞享三 二十一
美り社法示

山余分

あはれをさるひくま柳の男門田邊柳よりく緑を
あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

春色柳也知

寛文十 二十九
山倉始

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

若草

延宝七 十
山苗庭

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

若草

延宝六 二十九
聖廟月夜法示

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

貞享三 五
山苗庭

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

若草

貞享元 二
山苗庭

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

山余分

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

行路若草

天和三

あつこのまはれをくまはれはあまをさるひくま柳

平蕨

寛文三三カ五
聖徳太子御宇

咲てりういのをたやひの谷よとまけ行くえかよれ

春月

寛文三三カ四
中月次

さるけさ恨うとあまきあうくくさし憐を月よとて

天和二

かよ月能まうくくさるるにさひをさうんまのり

貞享三五十九
内侍本山法乐
十百そ

をわさぬさうとくめおひらうよと月ようんもうさる

春月曲

延宝四四カ五
市当座

かよさおのめれもさるる月るさうさうさうさうさうさう

元禄元十二四
東社五五五

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

巾余命

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

春月

貞享五 正廿六
市当座

竹波さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

巾余命

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

春月

寛文十二秋

ねむらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

春月

月十二二廿五
聖徳太子御宇

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

春月

延宝三二十一
市当座

月さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

いと春月

あはれうとて可考

貞享三九十一
山内虎之助

春乃花のあけや花のあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

春月

貞享三九十一
山内虎之助

山内分

うさひの月、あけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

春月

寛文十二十四
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

春月

延宝五三四
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

天和二五七
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

元禄三五十五
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

春月

元禄四五十八
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

春月

貞享元三十四
山内分

あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに
あけのあけにあけのあけに

山

ふんばいさうしは波のさあそきあはれりの一の海の

喜曙地臣

寛文十
二月比 十廿四

このわああさうさつな様。うじ喜乃あまの

喜乃

延宝四
ツ多彦 八廿五

座のあはれさうらぬ喜乃のあまのさうさうけ

月 十廿一
貞享三
一

ぬきつておのけさうおぼよとるさぬのさうさうけ

淡乃そツ多彦

喜乃さうさうけさうのさうさうのさうさう

船

元禄三 三十五
正月比

さあはのさうさうけさうのさうさうのさうさう

の余分

晴乃さうさうのさうさうのさうさうのさうさう

喜乃

寛文十三 三十四
四月比

くぬけさうさうのさうさうのさうさうのさうさう

喜乃

延宝五 三十二
水原夜三法

つしつさうさうのさうさうのさうさうのさうさう

喜乃

天和三 四廿四
四月比

さうさうのさうさうのさうさうのさうさう

海原

延宝三 二廿一
三月比

さうさうのさうさうのさうさうのさうさう

延享四 十廿六
小倉屋

天和二 五廿五
小倉屋 志那屋

天和二

貞享三 五十九
内宿不 龍系
十百三十一

海内宿

元禄五 六十八
中宿屋
小倉分

秋よけるとすすつらつら
何のーしつらつら
秋よけるとすすつらつら
何のーしつらつら

湊宿

同日三十一廿二
本宿屋社月次宿系

かきこきーり定れ湊れ
かきこきーり定れ湊れ

小倉分

みまといよまもぬぬ
みまといよまもぬぬ

宿宿

寛文十二 廿五
聖宿月次宿系

このーわらわら海も
このーわらわら海も

喜野

元禄九 十廿七
中宿屋

あまーいよまもぬぬ
あまーいよまもぬぬ

このーわらわら海も
このーわらわら海も

雑

貞享四 十廿五
聖宿月次宿系

子さーふらわら海も
子さーふらわら海も

小倉分

海宿屋月次宿系
海宿屋月次宿系

雲雀

寛文十二 二十五
曹扇月次産系

入目守よりよはつりて云々

鶴

同十 十二廿四
四月次

も原の産はかたきり

糸楯

日十一 十六廿四
四月次

折りく柳の形ひ糸楯

元禄元十二 廿五
曹扇月次産系

都はよはれり

日 十二廿五

名もるは

糸楯

延宝二 三十九
少多也

ちい

花

寛文十二 六廿四
三月次

白妙の

延宝二 二廿四
日

暖

貞享三 廿九
日仍不

も

竹

延宝四 二廿六
重高

も

天和二 五廿五
百

も

裁

延宝 十二廿四
月 廿五
日 五
至 廣 岸 氏
貞享 三
換 万 石 奉 代

あまりに程なつてまふさくらもをさうつ一御
袖らくうつふも松風の目一水落も千うらん
うろくそくく一ふく宿ようもあまののせわうふ
尋

寛文 十
月 廿

むよひよ思ふあつてもあつてけい一程なつてあつて
おろけよもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

貞享 元
ツ 申 年

きよももつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

初

延宝 六
日

終る片枝のむらふよふい志あつてあつてあつてあつて
学始

貞享 五
日

候とつこの一ふくあまよあにまはさうとつてあつて
例

延宝 九
日

まもけん片枝の候中とあまのあつてあつてあつてあつて
見

元禄 二 二十二
於 室 同 月 奉 代 氏
あ じ ぶ 奉 代 氏

日 廿 四
天 海 三 月 廿

このふくあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

祝言

貞享三 三十九

山崎元

山崎元

むすし本傳ふきの御風さへふあまのいふくを
喜風ふけとあまの御神とてあまの御神とてむすむす

別

寛文十一 二廿四

山崎元

山崎元

海にぬをなまめさかりこころの世のこともあは
しきこころあまの御神とてあまの御神とてむすむす

文

天和三 二廿

山崎元

山崎元

こころの世のこともあまの御神とてあまの御神とて
あまの御神とてあまの御神とてあまの御神とて

貞享五 八十七

山崎元

山崎元

振うをくまのいひの御神とてあまの御神とて
あまの御神とてあまの御神とてあまの御神とて

皇映日

元禄四 九廿五

山崎元

山崎元

あまの御神とてあまの御神とてあまの御神とて
あまの御神とてあまの御神とてあまの御神とて

月前送

延宝四 三十四

山崎元

山崎元

くわいふ本のらに自ふかへて送よこしぬまは月
送よこしぬまは月送よこしぬまは月

天和二 五廿四

山崎元

山崎元

お神をぬまのいひぬまの白いぬまの送よこしぬ
送よこしぬまは月送よこしぬまは月

夕忌

寛文十三年三月廿四日
月次書

かきく夕忌のしるしあひのまききこまぬえり乃いりる

暮山忌

元禄二丁廿五日
月次書

まてあし一忌の陰ゆくみし世にいふ海にくぬまは

以余分

ぬまにいづくもあはしづの心暮よまは忌の夕忌

深山忌

寛文十三年三月廿四日
月次

あしそやあしそやゆき花もよみなまの花月と

花満山

同上三月廿五日
月次書

山まゆ緑もあはし姫のうらの忌のいろよ

延宝八丁廿日
以余分

りてみいりもあしそやゆき花もよみなまの花月と

山と忌

寛文十三年三月廿五日
月次書

白あしそ吹くもあはし姫のうらの忌のいろよ

山と忌

貞享五年三月廿五日
以余分

あしそ吹くもあはし姫のうらの忌のいろよ

あしそ吹くもあはし姫のうらの忌のいろよ

遠山忌

元禄三丁九日
天徳月次書

あしそ吹くもあはし姫のうらの忌のいろよ

以余分

あしそ吹くもあはし姫のうらの忌のいろよ

水邊花

延宝三 三廿四
四月次

ちくぬま風ぬらううらたけくまをさの鏡はくるといふん

古古意

寛文十一 二廿五
聖廟以法宗

御行へく山極よこりやま此初瀬のうらるるをわたり

俗意客来

貞享三 三廿四
四月次

これよこるおひのほろ人めをよびてさやとたゆん

由余少

さよひをきれをうらうらわ家よすらうらうらとてな

花下忘帰

寛文十一 三廿九
由南左

さのうけ月うらよわくあやうらくかたか敷を井の花よこるん

花如舊

貞享五 八廿五
聖廟以法宗

さとのさかこいまめうらうらうらうらさかあかゆらさののさ

家道懐舊

元禄二 二廿三
物凝花田由南左

さひはけらうけさの袖乃をうらうらさかぬ花をよらる

花半落

天和二 七廿四
四月次

落花

延宝六 三廿四
四月次

あはれをれとくうらうらあはれはまらまらさかの公を

天和三 十廿七
由南左七首左

あはれをれとくうらうらあはれはまらまらさかの公を

貞享三 五十九
内侍山はる 清光

さくしねあつぬくみの木乃とよらるる 雲夜あつもさくしね

藤室詠風

寛文 十三 三十五
重房月次山はる

さよふいさあひもさくぬ風もも身とまをせてあつさくしね

川沼詠社

日十二 三十四
四月次

あともさくぬくみさくぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

岩室詠社

元禄二 二十三
四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

毎年愛社

貞享四 二十四
四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

日

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

志賀詠園

元禄四 三十七
五月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

花有遅速

延宝二十二 三十四
四月次

あつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風もあつぬ風も

野詠

延宝九春
紙幅一寸

けを又あつてとくすふく世への處の家語處とて

野外遊録

貞享元三廿五
四月頃

あつて世への處の家語處とて

川余分

あつて世への處の家語處とて

連日

天和三三廿四
四月頃

あつて世への處の家語處とて

川余分

あつて世への處の家語處とて

春日遊

元禄二九廿五
正月頃

あつて世への處の家語處とて

川余分

あつて世への處の家語處とて

三月二日

延宝九上巳

あつて世への處の家語處とて

桃花曝錦

天和三

あつて世への處の家語處とて

山梨花

元禄二三廿五
正月頃

あつて世への處の家語處とて

川余分

あつて世への處の家語處とて

石清水臨持奈

延享八
四月

八橋の
野徑

野徑

寛文十
三月

あつ

田蛙

寛文十
月

行

貞享五
月

せ

蛙鳴

元禄三
月

の

貞享五
月

ま

夕苗代

貞享元
月

水

貞享五
月

ま

苗代水

貞享三
月

勢

貞享五
月

ま

雨後苗代

貞享五
月

あ

貞享五
月

後

瀨陽

貞享三十五
日傳書宗十卷

ふひあきとよにいていこころかふのくし

歎を

延享五十二
少南庄

ふかじんびし局の記をひてほらあともなひは

元禄二十
紙幅一寸

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

夕歎を

寛文十
四月

山崎の海をわたるのつらさを記す

河歎を

日十一
山南庄

河海のあつたきさを記す

岸歎を

貞享三十九
日傳書宗十卷

ちかぬともふくかたのつらさを記す

離歎を

日二十
山南庄

とふ人よわが川をわたりて

山南庄

ゆきまののりあつたを記す

後

天和二

都をたてわたりて

貞享三八
續百少南庄

嘆友れは満ちて

後記

寛文四 正廿四
中苗在

紫れくくく誰くくくく
りくくくくく友のくくく

藤花伝風

貞享九 正廿四
中苗在

吹引くくくくく友のくくく
ねのくくく

雨申藤

元禄五 十廿六
玉津浦社以渡来

少くくくくくくのくくく
くくくくく

中余分

少くくくくくくのくくく
くくくくく

日

くくくくくくくのくくく
くくくくく

水邊藤

寛文十一 正廿七
中苗在

くくくくくくくのくくく
くくくくく

池藤

寛文十一 正廿四
中月収

あくくくくくくのくくく
くくくくく

瀧下藤

貞享二 八廿四
中月収

咲友れくくくくくのくくく
くくくくく

中余分

咲くくくくくのくくく
くくくくく

治友

日之五 廿
日信楽京法院

くくくくくくくのくくく
くくくくく

松藤

天和二 三 廿
中月収

くくくくくくくのくくく
くくくくく

山余分

後の山よそそくぬ友浪にわくはしとて

名所友

天和三九廿五
山余分

かよひて世のまじさう海とわくわくはなれ友なる

山余分

田子たふしひきそれに川海のまじさう友なる

暮春

寛文十一廿四
山月分

のりきこかよひて海とわくわくはなれ友なる

延宝六廿四
日

祝名のもとにのりきこかよひて海とわくわくはなれ友なる

暮春日

寛文十二廿五
一重扇日分

りきこかよひて海とわくわくはなれ友なる

天和三八廿七
山余分

あつてを海とわくわくはなれ友なる

山余分

かよひて海とわくわくはなれ友なる

こころ

天和四十二
山余分

よきよみそく海とわくわくはなれ友なる

山余分

わいさちそく海とわくわくはなれ友なる

こころ

延宝二廿九
山余分

鳴りて海とわくわくはなれ友なる

日廿三廿八
日

みそく海とわくわくはなれ友なる

寛文十二三廿五
重高日次記

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

鐘

延宝三三廿四
川月次

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

春歌暮

元禄九十二七
山田庄

くさのたもはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

川金分

わひはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

急惜春

貞享五五廿五
重高日次記

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

川金分

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

春已歌暮

寛文十二三廿四
川月次

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

山残春

貞享四九廿五
重高日次記

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

川金分

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

二月盡

日三十九
貞享四九廿五

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

春天象

元禄四九廿五
天師正月次記

あはれはるる花とてまはしとてはるる花とてまはし

春風

延喜二二廿五
重層月夜花系
少余力
自享二五十九
内侍和漢系十吉等

春夕

宣文十一廿廿二
水之味及漢系

一夜

天和六八十一
形苗在

一夜

貞安十三二八
山苗在

春夕胡

元禄二二朔
伊豫守山法系

一日登山

貞享五二廿二
水之味及漢系
水之味及漢系
中余分

春松

元禄二二廿五
形苗在
中余分

春松幹子年

元禄二二一
川合始

川合

いふ世とけりし時を
こころをききしとき
こころをききしとき
こころをききしとき

寛文十一四廿四
四月次

長保なる山つや
こころをききしとき

こ神祇

元禄二二五
川合始

いふ世とけりし時を
こころをききしとき
こころをききしとき

祝

寛文十一二八
川合始

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

湯春布徳

元禄四二一
川合始

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

風光日新

天和二二二
川合始

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

川合

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

家概春

月四二廿四
御合始

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

川合

いふ世とけりし時を
こころをききしとき

春

玉鳴河

寛文十一

とらんやの浪七月の朝のまきえいさめり金らん

貞享九八十四
四月

玉のわかれ河上よけりめあははる河く海わたる

小金

春柳れいまをばけぬきく海わたるのさくら

春
三輪

寛文十一

くまの川いりるゆえんは梅のさくら香のまきえいさめり

麦之部

首麦胡露

元禄十二廿二
正月廿二日

まきえいさめり梅のさくら香のまきえいさめり
まきえいさめり梅のさくら香のまきえいさめり

首麦藤

貞享二六十二
十月九

まきえいさめり梅のさくら香のまきえいさめり

田家首麦

延宝二六廿五
正月廿五

まきえいさめり梅のさくら香のまきえいさめり

林首麦

寛文十六廿五
聖廟山法集

貞享二六廿五
日

山余分

元禄二六廿五
聖廟山法集

山余分

更衣

あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し

延宝八二廿五
聖廟山法集

山家更衣

貞享三二廿五
山月次

あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し

山家更衣

寛文十二廿五
聖廟山法集

新樹

延宝六十四廿四
山月次

貞享三二廿五
日

元禄元十廿五
聖廟山法集

山余分

あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し
あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し

新樹胡凡

寛文十一廿五
聖廟山法集

あふふふふの林も折よあふふふふふのみる海し

新樹歌

貞享四六
四為度
日 卯余分

あまのりたるまのたふし事とてなむかふもほろと
夏木とちわらふまのまほほろとてなむかふもほろと

山新樹

寛文十四十九
四為度

紅花やまのまほほろとてなむかふもほろと

天和二五二
日

はく根のまほほろとてなむかふもほろと

卯余分

まのまほほろとてなむかふもほろと

卯余

貞享三五十九
卯余分

はく根のまほほろとてなむかふもほろと

貞享四七廿五
卯余分

ありよりのまほほろとてなむかふもほろと

卯余分

まのまほほろとてなむかふもほろと

卯余似月

貞享元四廿四
卯余分

白牡丹のまほほろとてなむかふもほろと

卯余分

卯余のまほほろとてなむかふもほろと

卯余似花

貞享九六廿四
卯余分

卯余のまほほろとてなむかふもほろと

卯余似

元禄五廿十八
卯余分

谷のまほほろとてなむかふもほろと

川分

夕月歌しつるや守石の戸に公りつてとこけりしもの
浴外花

元禄三二二一
春日社浮束の巻

若くは浪や多きは心れ残るよきけりれもの
し女子は母もあはれ花やむのりさうれ玉川の里

川分

外花作端

延宝三二六廿五
聖廟四巻

妻はねへそとあはれ申垣はくくのたはさうまひる

雛外花

貞享五二二五
妻の社浮束の巻

あけつてふ雛の友もよけれまききふとれ花の法
冬ころかきこりれ外花れものまききまきき

川分

葵

寛文十二四廿五
聖廟四巻

赤まらけふのまききらうむのりさうれ花の法

挿葵

同十二六十五
川分

赤まらけふのまききらうむのりさうれ花の法

山葵

貞享三二五廿
内付巻束の巻

あはれ花のまききらうむのりさうれ花の法

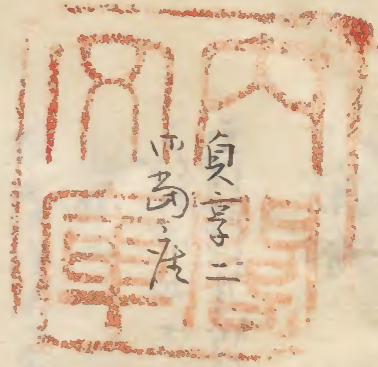
葵懸簾

元禄四四十二
玉川社浮束の巻

玉川社浮束の巻

川分

玉川社浮束の巻



傾心向日葵

生るり根もあやしく日影は清きひも葵は

郭公

同三四十一
川島彦

くも雨ふりて中世のつらきさしれいしくさあ

川島彦

人の妹あはれす事やけさる人といふ神はたぐん

纏

寛文十二四廿五
聖廟月次法楽

むさめはあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

待郭公

延宝五十二四
川島彦

あまのすめみまもりのあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

貞享三十八
續百五彦彦

そは世よりききせよあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

人傳郭公

寛文十二四十五
川島彦

あまのすめみまもりのあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

初陣郭公

同日
聖廟月次法楽

あまのすめみまもりのあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

雲間

同日
川島彦

あまのすめみまもりのあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

曉

延宝四十四
川島彦

あまのすめみまもりのあはれす事やけさる人といふ神はたぐん

天和三四廿七
廿九

廿九分

元禄五七十八
廿九

廿九分

貞享二二十四
廿九

野郭云

暮時鳥

元禄三十二
廿九

海鳥

天和三五廿四
廿九

舟中郭云

日
廿九

郭云教書

寛文十五廿四
廿九

早苗

寛文十二廿五
廿九

採早苗

天明之四廿一
廿九

美所乃たのめむらさきもよもひのやむらさき

みゆの月のそよ風のそよ

不しき風のそよ風を井は春田よよめむらさき

きしほもそよそよそよ時を本ははははは

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

不しき風のそよ風を井は春田よよめむらさき

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よよそよそよそよそよそよそよそよそよ

早苗多

延宝二五十八
市取

きや又きやうとてあひまはあひまに田子たは

薄暮早苗

元禄四 十
玉津川

あはててあひく早苗のきき葉も田子の秋風を

四余分

くもきやうとてあひまはあひまに田子たは

山田早苗

延宝九四十一
はる彦

くもきやうとてあひまはあひまに田子たは

端午興

元禄二四十五
重慶川

いやきやうとてあひまはあひまに田子たは

四余分

あひまのきき葉も田子の秋風を

江菖蒲

貞享九六廿五
はる彦

くもきやうとてあひまはあひまに田子たは

四余分

あひまのきき葉も田子の秋風を

沼菖蒲

寛文十八廿四
四月辰

あひまのきき葉も田子の秋風を

橘

天和六二廿四
日

あひまのきき葉も田子の秋風を

貞享三九八
春日社

あひまのきき葉も田子の秋風を

川余分

百変せむく風とのまきや神のまきにはりふくを

意楼

寛文十一 丑廿五
聖廟 辰 丑 辰 辰

おろよおろよのまきいよのまきをまきよまきよ

川余分

しらむねなるるおぼろしきあけおぼろしき

川十二 辰 丑 廿七
川 寅 辰

百変せむく風とのまきや神のまきにはりふくを

延宝五 丑 廿四
四月 辰

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

夜楼

元禄四 十一 廿五
元禄 五月 辰 丑 辰 辰

おぼろしきあけおぼろしきあけおぼろしき

川余分

しらむねなるるおぼろしきあけおぼろしき

夜楼

延宝九 丑 廿四
慶長 丑 辰

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

貞享三 丑 廿
内宿 辰 丑 辰 辰

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

元禄五 丑 廿六
内宿 辰 丑 辰 辰

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

川余分

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

困屋

切

延宝五 丑 廿三
川 寅 辰

あふなるるまきおぼろしきあけおぼろしき

新橋同昔

元禄二四二
川島彦

神楽川... 橋

川島彦

新橋散風

寛文三六廿五
西園寺氏

里橋

寛文十六廿五

里橋

延宝四十一晦
川島彦

六月雨

貞享元六二
川島彦

川島彦

元禄二五十九
川島彦

日

元禄二二廿五
西園寺氏

川島彦

霖

寛文五廿
川島彦

きんぐ... 六月の雨

梅雨久

延宝二五廿九
四月六

夜六月雨

貞享三五廿四
四月六

水鶏

天和三五十三
四月六

名残の雨やうつくしの鶉の志のまに明かんとす 栴の戸月
ての戸のあけぬ敷いさ月に行くと水鶏の志はをて

鷄

寛文十一五廿四
四月六

おんころのあもあれ月とさきものさかるとて存ぬよと

夏月

延宝二五廿四
四月六

川四四十三
四月六

すしきいさしきかみはわそ 神は神事月の暮る
てやうとて光とていさしきとて物なる月すしき
みころちには風とていさしきとて秋の月のはけを

日 四六六十八

天和二五十一
日

日

雨後夏月

延宝九四十七
庚辰市倉

世のしほぬ秋やうきとて人月はともはく清き
あまのしほぬ秋やうきとて人月はともはく清き
あまのしほぬ秋やうきとて人月はともはく清き
あまのしほぬ秋やうきとて人月はともはく清き
あまのしほぬ秋やうきとて人月はともはく清き

外山夏月

寛文十一回廿五
夏月

切やまき月をあらはしなるは夏のついでに

浦夏

延宝八六廿四
夏月

うと浅くもそとにけはるも 誰はあはれに 秋の月

水戸夏

寛文十五廿
夏月

光鳥川をよるや けふの夏月は

山家夏月

天和三五
夏月

山風を殊あはれに けふの夏月

竹亭夏

元禄二四廿五
夏月

那を竹の葉にけふの 秋の月

四余分

風を竹の葉にけふの 秋の月

胡折瞿麦

元禄五八十四
夏月

今朝のあけをけふの 夏の月

四余分

今朝のあけをけふの 夏の月

籬瞿麦

貞享四六一
夏月

今朝のあけをけふの 夏の月

四余分

今朝のあけをけふの 夏の月

夏草

天和三十廿七
山崎茂七郎白

夏海くまきりまきりな草花のしらべし人たれもあきま

葎草滋

元禄三八廿一
玉津社月夜夜木

煉りて咲も何のいふ心もささげし庭の草花も

口余ら

名も知らぬ草花のけしき秋の草花の傳へし

月下葎草

天和三八廿七
山崎茂七郎余ら

夏草のけしきもささげし秋の草花の月夜も

杜葎草

寛文十七廿五
中島茂

花のけしきも秋をちりて夏にけしき杜のけしき

水邊葎草

寛文十三廿五
山崎茂七郎余ら

花のけしきも水邊のけしきも秋の草花のけしき

鶉川

月十二廿五
日

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

元禄四六廿五
山崎茂七郎

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

元禄二六廿七
山崎茂七郎

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

山崎茂七郎

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

鶉川葎

延宝四十四
山崎茂七郎

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

天和二五廿七
山崎茂七郎

花のけしきも鶉川のけしきも秋の草花のけしき

遠近橋川

元禄五十四十二
書海社月夜宗

山余分

日

深山照射

寛文十二五廿五
重朝月夜宗

筆照射

貞享五十四六
山余分

りさるゝを重人ヲ橋洞火と比川流のそとそらうゝる
こはにえ明りにはく、ゆる火にくせくろくろく丹がらん
とくくく申稿舟夜々そ流そくろくろく火にけ
山小村本くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
よる麻と松のからくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

深夜虫

貞文十六七
山余分

水過量

貞享二十三
山余分

水過量

天和二三四
山余分

山余分

日之
紙燭一寸

灯とききとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
湖津波くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
たむし物も夜にけりそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
今秋の流し量れ流のせり乃若くは波のせりそそそそそそそそそそそそ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

延享九六九
檀野殿

まふしきさきいふおのりきりてはつちの御、おかり火

天和二五廿五
百々田南九十四

まふすし、檀野園よりいふおのりきりてはつちの御

貞享三八
續百々田南九

なまらうりていふおのりきりてはつちの御、おかり火

日四六一
田南九

おのりの御、おかり火

貞享分

すまふしきさきいふおのりきりてはつちの御、おかり火

元禄四八二
おのり社月以深不

あつちの御、おかり火、おのりの御、おかり火

貞享分

いふおのりきりてはつちの御、おかり火

遠村救火

天和三五十四
四月次

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

貞享分

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

閑居故火

貞享三九廿二
田南九首上

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

蓮

寛文十二六廿五
重廟月以深不

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

行露

延享三六十四
四月次

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

氷室

貞享五四十五
重廟月以深不

おのりの御、おかり火、おのりの御、おかり火

小余分

六月の七日の夜に

夕立

延宝三
小南庄

夕立一と涼一村の

夕立早過

貞享九
日

夕立六と涼一村の

小余分

夕立七と涼一村の

遠夕立

天和二
小月次

夕立八と涼一村の

嶺夕立

貞享二
小南庄

夕立九と涼一村の

小余分

夕立十と涼一村の

夕立

元禄三
聖唐月次

夕立十一と涼一村の

小余分

夕立十二と涼一村の

村夕立

貞享二
小南庄

夕立十三と涼一村の

小余分

夕立十四と涼一村の

夕立

延享三十三廿
四月辰

ぬくくみほのまよふえとよきまよはれぬ蝉のともる夕

山語蟬

貞享五十六廿五
重廟月辰洋系

せほく急本よ涼しき夕暮の弱とすそを待つ山語を

山余命

鳴く急も急けき本よ夕暮を待つ山語を

杜蟬

寛文十六廿四
四月辰

日くく乃夕夕を杜の名はきり涼しき夕暮を待つ

延享五十四
山余命

かくせし急も急けき本よ夕暮を待つ山語を

貞享三十五廿
日信宗洋系

夕のひらけ杜の本よ夕暮を待つ山語を

樹陰蟬

延享九十六廿四
唐樂島南系

蝉すそそよみの夕つとらくく夕暮を待つ山語を

晩夏蟬

天和二六廿四
四月辰

夕のひらけ夕暮を待つ山語を

夕涼

寛文十三廿六廿五
重廟月辰洋系

夕涼き夕暮を待つ山語を

夕涼月

貞享三六廿五
重廟月辰洋系

夕涼き夕暮を待つ山語を

山余命

神のく急も急けき本よ夕暮を待つ山語を

暮涼納涼

天和三六廿四
四月

物と心とを共にしにぶつとす本と意をたしむる日影のよ
泉

寛文十三六廿五
西暦四月廿五

月と心とを共にしにぶつとす本と意をたしむる日影のよ
松下泉

元禄九十二十七
四月

清水せいののむらさきとて深き松の下から
夏と心とを共にしにぶつとす本と意をたしむる日影のよ

貞享二
市南

神子宿経之けりし深きのとて泉とて水のつら
近水微源生

貞享二
市南

神子宿経之けりし深きのとて泉とて水のつら
夏後

延宝二六廿四
四月

河波たらしむれとて世神子之けりし
瀬夏後

同
四月

河波たらしむれとて世神子之けりし
夏天象

日
五月廿四

日影のよ
夏日

延宝二六廿二
市南

日影のよ
夏風

寛文十六 廿五
聖廟遷葬式勅

松竹風と一色秋と志野の御

麦雨

延宝二六 廿二
小南在

まらねぬ神のあつと何ふと風うらむに

麦盡晝

元禄二四 廿五
小南在

さそり後とあまはあき日あつとくらし

小南在

すこまーのいんがたあまは照らつとよま

日

あまのまあまにさあぢいんあまのう

麦心

寛文十二 廿五
聖廟遷葬式勅

あまのまあまにさあぢいんあまのう

二野

寛文十二 廿五
聖廟遷葬式

かゝ人のたさあまあまあまあまの

二本

日
四月 廿

卯心の新しうとていしりいすまあ

二本

月十五 廿九
小南在

卯まの卯月心あまあまあまあま

二枚

貞享二 二十
日

卯まの卯月心あまあまあまあま

小南在

卯まの卯月心あまあまあまあま

延宝五 五十一

しほさきのすしうふもふの月とくはちかた

ニ 雑お

寛文十二 五十四
四月廿

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ニ 送

日 六十六
少多左

更なる春のやうとじいふふふの月おしり

ニ 衣

日 廿六
重宿月七

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ニ 衣

寛文十二 四十九
ツ多左

福ちうけのこゑんふけのふゆは

ニ 色

日 六十五
重宿月七

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ニ 考

日

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ニ 声

日

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ニ 旅

貞享三 五九
ツ多左

あまのうらみあはれふくはつとまのふゆは

ツキ

ふい衣もらふ神のすゝに世中八柱のきよきすまひ

友祝

寛文十
重高月比 或人

いづの風とついでにのきこふまはひくすまひ

日三
十月比 四十四

まもる世おのりもつゆのまはひあはる風のきこ

友 春豆 牧

貞享五
重高月比 三十五

秋ちよつづのきこすまひのまはひくすまひ

ツキ

田より流るる水もあはる友草にふの約りきこすまひ

秋之部

立秋曉

貞享五
重高月比 九十五

一年のまもるおろく曉乃後つこらよ秋いふまはひ

元禄二
ツキ

あもすまはひあはる友草の志乃あはる秋のきこ

初秋

寛文三
十月比 六十四

けさのあはれけこらよ秋風よめよあはるあもすまはひ

初秋月

元禄五
重高月比 七十五

あはれもすまはひあはる友草の志乃あはる秋のきこ

風

延宝四 二十三
ツル存

日 六廿四
山月比

貞享元 十三廿四

山月比

本の上まゝいづれか秋の色をさらさら萩のよき風
このはるもいづれか秋の色をさらさら萩のよき風
萩のよき風よりいづれか秋の色をさらさら萩のよき風
吹之てけいれりし秋の風すらいづれか秋の色をさらさら萩のよき風に

河初秋

寛文十 八廿四
ツ月七

いあぬ秋のうらみ吹くも河川喜相なるこのころを

早秋

貞享三 五十三
ツる存

山月比

あはれてまじくは葉花末ころもまつきよき秋の初風
あはれ初なるあはれり小打きよき秋の風の色をさらさら萩のよき風に

早秋

貞享三 五十三
山月比

山月比

秋の色はさうとぬあはれ初け桐の一葉ともいふづ
初なるまほしき秋の色も初風いづくあはれり小打

新秋

元禄二 九廿一
壬辰卯月比

山月比

秋の色はさうとぬあはれ初け桐の一葉ともいふづ
初なるまほしき秋の色も初風いづくあはれり小打

早涼到

延宝四 七廿四
ツ月七

月九 七廿九
廣取ツる

あはれり小打きよき秋の風の色をさらさら萩のよき風に
吹風もあはれり小打きよき秋の風の色をさらさら萩のよき風に

貞享四十四 十五
重廟月次

此のちか／＼とすすむるはつと秋のゆくをうらな
残暑

寛文十三 七十四
八月辰

吹きま／＼秋風ぬくむはかた風のゆくをうらな
日 秋のゆくをうらな

貞享元 七十四
日 五十九
日徳宗元永正

秋風いつ神さへ初風のゆくをうらな
七夕雲

貞享五 九十七
丙午辰

氷江のゆくをうらな
この地儀

寛文十一 七十四

ちか／＼とすすむるはつと秋のゆくをうらな

以余分

かげのゆくをうらな
この後胡

寛文五 八十三
丙寅辰

あはれゆゑのゆくをうらな
この草花

天和三

うらなゆくをうらな
七夕経巻

慶安四

しなやか／＼とすすむるはつと秋のゆくをうらな
乞巧曼

貞享元 七十四

あはれゆくをうらな
あはれゆくをうらな

星河秋久

延宝八 七夕

世に秋の夕暮の霞に似ては 一秋をよめるあふれと

二星雙久

貞享三 日

天河と移く世にあふれもとまらぬ秋の秋やうへん

ツキ

銀河ももも一か秋のよはにふれよけの秋のあふれ

織女結夕

日二

夕暮の霞に似ては 一秋をよめるあふれと

ツキ

銀河ももも一か秋のよはにふれよけの秋のあふれ

芳織女衣

寛文十 七夕

あまのこの天の織衣さうとえとあふれあふれ

ツキ

銀河ももも一か秋のよはにふれよけの秋のあふれ

織女舞

寛文十一 七廿五
聖曆月次巻末

天のこの織衣さうとえとあふれあふれ

金宵織女後天の

延宝三 七夕

て川のこの織衣さうとえとあふれあふれ

牛女収穫来

寛文十三 七夕

あまのこの天の織衣さうとえとあふれあふれ

代牛女述懐

天和二 七ノ

中余分

あまのあはれはるる人々たゞ秋にいとむき世に
うさじもつよきあせつひもつよきあせつひのり合
詠の月水歌

延宝三 七ノ

天のうしあはれけり月水歌のうしあはれ
鳥鶺成摺

寛文十三 七ノ

きよふともよきあせつひもつよきあせつひのり合
同萩

貞享三 五ノ
川原庄米上置

吹りてかきうろの雄風を新しの萩のよきあはれ人
に萩

貞享元 七ノ
少月比

是乃冬も海よ由る萩のよきあはれ人
月夜入江の波の萩はよきあはれをけり萩のよきあはれ人

延宝二 七ノ
少月比

萩似人來

風もよきあはれ月水歌のよきあはれ人
と萩もよきあはれ月水歌のよきあはれ人
詠人のよきあはれ月水歌のよきあはれ人

延宝四 七ノ
少月比

萩半鏡

はるるぬけ枝もあはれ月水歌のよきあはれ人
あはれに枝も萩のよきあはれ月水歌のよきあはれ人

粟方
おろし枝とりてお齊いふはひらひらとるる花のしほみ

萩露

貞享三十九
日集注系十百
り萩のうまふもてまきの木はひらひらとるる花

萩漸盛

寛文二十七年上
重廟月次注系
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

野萩

延宝五 二十三
山南在
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

野位

貞享三 二十
水原注系
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

山余方
おろし枝とりてお齊いふはひらひらとるる花のしほみ

貞享四 五 廿八
山南在
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

山余方
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

原
厚萩

貞享九 二 廿五
重廟注系
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

山余方
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

乃路萩

寛文十七
山南在
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

延宝九 七 廿四
山南在
うまふもてまきの木はひらひらとるる花

秋映水

延享八二二廿五
重廟法宗

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

新萩

元禄九十一七
山苗在

舟をりてうきとて海をこむ風は秋のこ

山余分

舟をりてうきとて海をこむ風は秋のこ

新萩

日四二二十一
おはれは月夜法宗

舟をりてうきとて海をこむ風は秋のこ

山余分

舟をりてうきとて海をこむ風は秋のこ

女布花

寛文十一七
山月以

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

延享三二八廿七
山苗在

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

貞享九七八
日

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

日三二八
續百三山苗在

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

野薄

延享八六廿五
重廟法宗

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

薄名場

貞享三二廿八
山苗在

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

山余分

あめあはれはくしきうきとて海をこむ風は秋のこ

薄似神

延宝七
十月廿九

分る神のまゝとすらんもむもむのふたふ

是列巻

貞享五
十月廿七

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

ツ金

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

葉蒸風

天和二
十月廿六

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

葉蒸

寛文十三
十月廿七

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

風あそび

寛文三
十月廿六

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

秋巻

元禄二
十月廿六

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

風動野巻

日
十月廿六

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

秋曉巻

貞享四
十月廿三

まのわがやめまのわがやめまのわがやめ

四余

有りのひよきくくふおれ光やけあふらふつ世

奇腕

寛文十
四南庄

朝ふりしむもくぬ秋をよむすりきあふあふし

悲翁

貞享二
月佐宗

とさよめぬあふとあふくあふ袖すくさひきぬん

竹

日
十九

さ枝よりほふふふふけいあて竹のけいふふあふ

枕

天和二
九十五

あふふふ枕の秋をさすししむくさ手枕り

い余

身秋のこいさし海よあふけくさふ枕も

尋虫

天和二
七

里人こくもさすあふけくさひさし虫のさ

松虫のさふさふさくもさす後ぬさの糸うあふ

を尋虫

寛文
七廿
月

をさの風志のく人昔ふれあ根むしこいさ

野介尋虫

貞享二
七廿四

とくしとあふあふさしあふさしあふさし

との名ふらふさあふあふあふあふあふあふ

い余

曉更虫

寛文十 七廿
月廿

あめよしのとあ秋のしづむをのき独りしづくらん

田家

元禄二 二十七
日廿九

あまの陰とくして秋の田はるふのあよまはらうらん
秋のあふるさしむふ山田は庭をてふむりうらん

床

日五 三廿六
日

あまのしづむをのき独りしづくらん
あまのしづむをのき独りしづくらん
あまのしづむをのき独りしづくらん

松虫

延宝四 七十四
日廿九

あまのしづむをのき独りしづくらん

海邊秋風

貞享二 七十四
日廿九

あまのしづむをのき独りしづくらん

曉聞麻

寛文十 七十五
元禄二 三十五

あまのしづむをのき独りしづくらん

元禄二 三十五
日

あまのしづむをのき独りしづくらん

日余分

あまのしづむをのき独りしづくらん

深夜聞麻

貞享二九サ四
ヨリ伏

あかぬ夜と河に糸とあはれきたるは糸の書かす
そのはらばらぬ夜とあはれきたるは糸の書かす

聞麻

寛文十三七サ四
ヨリ伏

さくねのぬあれと河のうらなとあはれきたるは糸の書かす
山麻

天和三十サ七
ヨリ伏

なつき夜と徳の祈り山とあはれきたるは糸の書かす
外山

元禄二五サ五
ヨリ伏

ふたらの秋とあはれきたるは糸の書かす
山麻

谷

寛文十三七サ五
ヨリ伏

谷のけれ松いつそ山とあはれきたるは糸の書かす
野

貞享二五サ
ヨリ伏

あかぬ夜と河に糸とあはれきたるは糸の書かす
海邊麻

天和二七サ四
ヨリ伏

波うきぬ神とあはれきたるは糸の書かす
田

貞享四十三サ四
ヨリ伏

小男麻とあはれきたるは糸の書かす

田家麻

貞享三十九
日 徳永彦宗

りやあしきつるに田れは秋をたしくうまきと河のいそ

麻隠萩

日 四十二廿五
重庵日伏

はく萩に下はりてやと麻と色はんさう書意のいそ

少余分

をふらぬ書あつ神と咲萩のあはこもろと麻やうん

海影草

日 寛文二十七廿五

やうらうけあそと久くは萩と河ははる色あははる

麻夕近枕

天和二 廿五
川南丸

あはれとさか萩はるあはれん枕のつはは河のいそ

川余分

はくはるさそとあけし萩と色はるさうさう書意の物

故心秋夕

貞享三十九
日 徳永彦宗

く神とあはれさうはるさう萩はるあはれん秋と

秋田露

元禄三十二廿三
日 徳永彦宗

はく神のさうさうさう萩はるの萩あはれん小田れ秋は

少余分

はくはるさうさうさう萩はるの萩あはれん小田れ秋は

月

寛文十一 六廿四
日 川南丸

はくはるさうさうさう萩はるの萩あはれん小田れ秋は

日 十三 七廿四

はくはるさうさうさう萩はるの萩あはれん小田れ秋は

延宝二二廿四
四月辰

ふらふらに雲をよみて梅をよみてささぎをよみてさとうの月をよ
逐夜月明

貞享五七廿五
重高月辰

こころをよみてささぎをよみて梅をよみてさとうの月をよ
前とよよ深ね桂をよみてささぎをよみてさとうの月をよ

日 小倉

待月

日元二二十三
田高月辰

雲のよれさう秋のよれさう秋のよれさう秋のよれさう
ささぎをよみてささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ

元禄二八廿五
重高月辰

秋のよれさう秋のよれさう秋のよれさう秋のよれさう
折して待つささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ

小倉

秋見月

貞享二八十七
田高月辰

ささぎをよみてささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ
雲のよれさう秋のよれさう秋のよれさう秋のよれさう

閑見月

貞享四八廿五
重高月辰

ささぎをよみてささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ
地をよみてささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ

小倉

桂見月

寛文二二十八
田高月辰

ささぎをよみてささぎをよみてささぎをよみてささぎをよ
稍傾月

寛文十九
三

更けにさしよるおきけ青あつと申す
かたはらふにふらふと

三日月

日十三八
十五

申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

新月

天和之壬
五苗

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

日全
分

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

夕出月

文政四八
十七

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

と信月

貞享元六
廿四

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

日全
分

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

十五夜月

寛文十八
十五

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

日全
分

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

文政二八
十五

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

日全
分

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

貞享四八
十五

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

八月十五夜

文政三八
十五

あつと申すにほつとてふまじき月に入つては
あはれ山さへ

居待月

寛文十九 十三
四馬彦

しるは清徳宵中まぬ月ふるに雲を風乃松の榎り

十三夜

元禄五九 十三
四馬彦

いりのまをりや我を秋よれあむ去月けり幸

四余彦

と秋の月なるを秋とてりきりうけ居り松ふり

十三夜月

寛文十三 九十三
四馬彦

この秋のあまのまを面もあまのまの月のまをけり

定宝三九 十三
日

十日あまのまをぬけり名を月なるを秋とてり

日四九 十三
日

又まをいなるを秋のまをまを本けりなる月けり

定宝七九 十三
日

妹をまをまをけりあまの月けり松

九月十三夜

天和三九 十三
日

まをまをまをぬけり名を秋とてり

四余彦

みやまをまをぬけり名を秋とてり

月前風

貞享元九 十三
四馬彦

秋の秋をまをぬけり名を秋とてり

前露

定宝二九 十三
日

又りのまをまをぬけり名を秋とてり

終夜月

文室四八十七
山月

あけぬしを月かゝるる風はなほ秋あり月ハさるる

夜雲收盡月行遠

日九 九十三

少雲高し秋風思ふ言きて云くその月の一つき

山月明

元禄五三廿五
天保五月後

山より山をみえて照月よ海よりあつた雲もききえつ

山月

さやけい雲吹つて山嶺のありとて出れ月ハ

山嶺月

寛文十一廿四
四月後

雲うほ峰は相束はるるおんを伝ふ月のはひくまき

貞享五七廿五
四月後

山はさるる山はさるる山はさるる山はさるる

野月

貞享三三十九
月付下流

河をみる時月ハ草枕むさひすくや秋もは

原
源上

寛文十三九十三
山月

月ハさるる山はさるる山はさるる山はさるる

橋月

貞享三三十八
流下を山月

山はさるる山はさるる山はさるる山はさるる

水邊

天和二二廿二
水邊及山月

山はさるる山はさるる山はさるる山はさるる

山月

山はさるる山はさるる山はさるる山はさるる

月照流水

寛文十^二八^廿五
重高月夜

り物なくそあつたれ川水もえんとて流月をなれ

江月

元禄三^九十二
山崎彦

松とてついでに流すもあまきやうく月を照らす

江上

延宝二^二十九
日

えとともえまほほ江流もよからぬ秋の月を友舟

海邊

同
日集
元禄
五^九四

多きとて中ふあつてもなれ月を照らす

河邊

元禄四^五八^廿一
玉中社
日集

あまきやうくあつてもなれ月を照らす

日集

あまきやうくあつてもなれ月を照らす

海邊

寛文十^三八^廿五
重高月夜

いあつたれ川水もえんとて流月をなれ

延宝四^二四
日集

あまきやうくあつてもなれ月を照らす

湖

天和二^二廿四
日集

あまきやうくあつてもなれ月を照らす

日集

あまきやうくあつてもなれ月を照らす

湖上

貞享三二廿
月信本は平は解 雲方と流吹風のありては月より

渡

天和三二廿四
四月候 七夜に月を河に流すもては秋と月より

又之も細き海に天河一敷ありて月より

貞享三二廿
月信本は平は解 泉川の流すもては月より

古寺月

寛文十九
四月候 積もては秋と月より

故郷月

月十三 八十五
月信本は平は解 月信本は平は解 月信本は平は解

中余分
月信本は平は解 月信本は平は解 月信本は平は解

水

寛文十二八廿五
月信本は平は解 月信本は平は解 月信本は平は解

天和七廿四
四月候 この里に河に流すもては秋と月より

中余分
月信本は平は解 月信本は平は解 月信本は平は解

田家

寛文十二八廿五
四月候 月信本は平は解 月信本は平は解 月信本は平は解

田家見

貞享元九十四
四月候 秋風の流すもては秋と月より

山余分

山余分は山田に給延ふ月と云はれり

月屋

貞享四八十九
山余分

月屋は山田に給延ふ月と云はれり

園

元禄九十一十七
山余分

園は山田に給延ふ月と云はれり

山余分

園は山田に給延ふ月と云はれり

浅茅

貞享三十八廿五
山余分

浅茅は山田に給延ふ月と云はれり

山余分

浅茅は山田に給延ふ月と云はれり

名取

貞享五十五廿五
山余分

名取は山田に給延ふ月と云はれり

山余分

名取は山田に給延ふ月と云はれり

月茶蘇

天和之九十五
山余分

月茶蘇は山田に給延ふ月と云はれり

山余分

月茶蘇は山田に給延ふ月と云はれり

茶出

貞享三九八
山余分

茶出は山田に給延ふ月と云はれり

山余分

茶出は山田に給延ふ月と云はれり

月茶麿

寛文十九十三
四為度

同十三 八廿五
可為月尺

月茶麻

同十三 八十五
四為度

月茶様

貞享二十九十三
日

四余分

元禄五九十三
四為度

日

日

日

延宝二八十五

天和三七十七
四為度

貞享元九十四
日

日

日

日

かきまけぬにけはむらさき月子 四り 厚もつ人す

替ひの書けいひちちかきまけ月子 厚もつ人

ちかきまけ月子 厚もつ人

少い月子 厚もつ人

厚もつ人 厚もつ人

とぬき月子 厚もつ人

あきけ月子 厚もつ人

ちかきまけ月子 厚もつ人

月茶様

ちかきまけ月子 厚もつ人

月茶同録

月茶同録

月下掛衣

ちかきまけ月子 厚もつ人

ちかきまけ月子 厚もつ人

月下遊士

元禄二十十八
重信月次書

羨殺もさうしてやあつてもあつても
の月よゆくら秋の心を
うらもさうもさうはさの氣もさう
残もたれも秋の里人

月多秋友

延宝四九十五
川島彦

子世の娘とあぬかへ
はるまもみやふの月よ
月多秋友

月不撰妻

貞享元八十六
川島彦

あやみよの娘はさう
はるまもみやふの月よ
月不撰妻

月前述懐

延宝三九十三
川島彦

いよはさうさうさう
はるまもみやふの月よ
月前述懐

残月越圖

寛文十三八廿五
重信月次書

旅のうてさうな神山の
おぼもさうはるまも
残月越圖

惜月

天和三
川島彦

なつ月のなほさう
はるまもみやふの月よ
惜月

天和三五 廿五
百首あや 十二

寄月祝言

貞享元 八廿六
卯月

くせ乃妹もつ一年一雲社の月とてなやを傳へしは禁

初鴈

日之 五廿
内集は平十解

小雲のくせもつはなを傳へしは禁

雲回初鴈

寛文十一 八廿五
重唐月以送来

はやき一初月を伝へしは禁

秀中鴈

延宝九 八九
廣殿は會

初月を伝へしは禁

貞享二 九廿三
卯月

一初月を伝へしは禁

卯月

一初月を伝へしは禁

芦邊鴈

日之 十廿四
卯月

一初月を伝へしは禁

卯月

一初月を伝へしは禁

鴈似字

寛文十二 八廿五
卯月

一初月を伝へしは禁

秀

日之 八廿四
卯月

一初月を伝へしは禁

曉音

延宝五十二
三十四

元禄二九十七

中余分

夕

延宝四六四

中余分

古渡秋

元禄十二
二十四

貞享三九十一

田家音

元禄三四
廿五

中余分

遠村音

天和三七
廿四

中余分

栲衣

同日
三十六

山うらつらつきりてる音は松なる音也秋はあまんと長共

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

あまぬまはうらつらつきりて山吹あまぬまはうらつらつ

貞享二七
十月

あはれさへうろす申す衣そききうつこよききくもん
よそにはさきハキリ一良カハハハハハハハハハハハハハハハハ

掛衣到曉

延享九廿四
四月

月りまのそくしんそくやしろあつふりてあきぬむね

寛文十三廿四
四月

夕暮ハキリも色あき衣ちあき秋のそくしんハ

曉鳴

貞享三八
後百五十四

うすうすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

沃畔曉

延享四九廿四
四月

あつあき秋は田のそくしんそくしんそくしんそくしんそくしん

口野

寛文十三
四月

秋はそくまの人のそくしんそくしんそくしんそくしんそくしん

貞享五
九月

うきのも秋はそくまのそくしんそくしんそくしんそくしんそくしん

野分

寛文十三
九月

秋はそくまのそくしんそくしんそくしんそくしんそくしん

菊

貞享二八
後百五十四

紅き白きさうりもさうり月あつこくわに葉をえきぬ

裁

元禄元
十月

咲つる葉はさきぬる葉はほろりてくくくくくくくくくく

菊久著

延宝三 主師
あそめぬさうやいせ業よと色にわたり一歩は白く

為念身一

寛文三 日
さく菊やあまのりしと雲うとよふあまもるむうとすん

新菊有餘芳

日十 日
咲く秋をよゆくあひひてあまもるむうとすん

毎朝望菊

日十一 日
おろしはあひさしおはれ菊あつてもまは白く白く

園原菊決棠

貞享二 日
ふせもつ三つうううふせもるおよふふれ菊は後呂

山金
る種らうとふもむれ秋のさうとふにんきくふ

秋菊盈枝

日三 日
さうとふ小枝よりおもらもよかさるもる白く

山金
る月のけふさうに咲ふさう枝も志ふとあせけさ

新菊奇芳

延宝七 日
咲く乃色はちと神とあひひとあまもるむうとすん

菊糖如錦

貞享元 日
あまのさきをよむいふと世業能菊は目高酒きくひれに志す

水金分

さあしくは色に記すをさうき菊秋のよふにまはるるさうき

伴菊延齡

天和二 高湯

きふこの色にやあやき菊のさうきとさうき秋のあや

水金分

あや入ん秋のさうきとさうき秋のあや

敬菊延齡

延宝二 高湯

あやと菊のさうきとさうき秋のあや

挿頭菊

延宝四 高湯

あやと菊のさうきとさうき秋のあや

菊花久綴

天和三 日

不能控毛布衣の品は花は菊は不交而も菊は秋也亦交菊

花の好れさうきとさうき秋のあや

菊香春不如

寛文十三 日

咲菊よさうきとさうき秋のあや

重湯宴

元禄二 六 十五
天和三月次

咲菊よさうきとさうき秋のあや

咲菊よさうきとさうき秋のあや

行路菊

日五 九 廿五
西暦月次は不

咲菊よさうきとさうき秋のあや

拵

延喜八 廿四
四月
ほろ系あの子の...
...
...

...

元禄二 九廿五
四月
おまにあまの...
...
...

元禄三
四月
けあつ...
...
...

星黄葉

貞享九 八十一
四月
おほ...
...
...

紅葉源

寛文十二 九廿五
重層月
あ...
...
...

紅葉編

元禄二 廿八
四月
...
...
...

...
...
...

雨後紅葉

天和三 七廿四
四月
...
...
...

星

貞享三 五十九
日
...
...
...

龍島

寛文十二 九廿五
重層月
...
...
...

河紅紫

寛文九廿四
四月廿

立田川より河毎に枝と葉の波とほるる朝の光り

里

元禄二六十七
四月廿九

初紅紫たるも人け此の影くぬ里の光り

山余

夕日守りての紅紫も山に流るる村の光り

松

寛文九廿四
四月廿

紅紫の影もあつた松の影もあつた

寛文九廿四
四月廿

松の影もあつた松の影もあつた

紅紫文松

寛文十一
聖廟月廿

まつた松の影もあつた松の影もあつた

旅泊紅紫

延宝二二廿四
四月廿

くまの影もあつた松の影もあつた

每人惜秋

貞享二九廿四
日

秋の影もあつた松の影もあつた

山余

秋の影もあつた松の影もあつた

秋欲書

延宝四九廿四
四月廿

秋の影もあつた松の影もあつた

書秋

天和二十七年
四苗年
貞享五年
内儀

只今も秋の風吹まじり秋の心も
しやうと志しし秋の心も
言秋月

言秋月

寛文十九年
四月

只今も秋の心も
言秋月

秋霜

元禄九年
四月

秋の心も
言秋月

秋露

寛文十九年
四月

只今も秋の心も
言秋月

秋海

寛文十九年
四月

只今も秋の心も
言秋月

秋声

日十一
九月

只今も秋の心も
言秋月

秋夜

日十
九月

只今も秋の心も
言秋月

秋意

延宝二年
八月

只今も秋の心も
言秋月

秋山

寛文三年
四月

只今も秋の心も
言秋月

秋野夕

寛文十二 八廿四
ツ月比

夕の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

秋浦秋

日 日

月とてはまづしづかき旅のあはれはなほしづかき旅のあはれ

河

貞享三 二廿二
ツ月比

月よりと秋の月よりと秋の月よりと秋の月よりと秋の月よりと

ツ月比

月よりと秋の月よりと秋の月よりと秋の月よりと秋の月よりと

山家

日 日
九 八

世の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

ツ月比

世の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

貞享三 八廿七
ツ月比

秋の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

ツ月比

秋の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

旅

日 日
十廿二

秋の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

雑

貞享三 二七廿

秋の光をよみてわらふとて人々もあはれ月もあはれとて世を

初秋色

貞享元 九廿四
四月廿

秋風の涼しくはれなきははるかなる川を
候出る子種乃志よふりくくもなきまらりのあやう

中秋声

日

あまのあまのちこくはふりもなきはるかなる川を
秋をるふりしのころもなきはるかなる川を

後秋考

日

九廿四

つらき候をらりもなきはるかなる川を
春秋よふりしのころもなきはるかなる川を

後秋

元禄二十廿子
ツ金

さく葉をらりしの秋もなきはるかなる川を
かきまはるはる初秋よ秋のらりもなきはるかなる川を

